

小・中学校音楽科における鑑賞の力を高める具体的方策 — 「創作（音楽づくり）と鑑賞」の関連を図った題材を通して—

Practical Study for Improvement of Appreciation Ability in Music Classes:
Focusing on Subjects Considering the Relationships between Creative Music-Making and Appraising
in Elementary and Middle Schools

原 田 弘 昭*

HARADA Hiroaki

要約：これからの音楽科教育では、音楽的な特徴を聴き取る力をつけることと、それらの働きが生み出すよさや面白さといった質的なものを感じ取ることができるようにすることが重要である。本稿では、小・中学校音楽科の創作（音楽づくり）と鑑賞の関連を図った題材を通して、鑑賞の力が高まったかどうかを検討し、効果があったと思われる具体的な指導方法やワークシート・ICT 機器活用等について考察することを目的とする。研究授業では、音楽的な特徴〔共通事項〕を精選し、それらの働きが生み出すよさや面白さといった質的なものを感じ取ることができるように授業を仕組むようにした。その結果、研究授業前後に行った実態把握調査を比較すると、〔共通事項〕などの音楽の言葉を習得することができるようになっており、鑑賞の力が明らかに高まったと言える。その要因として、授業において創作（音楽づくり）で〔共通事項〕に着目しながら作曲の経験を積んだり、〔共通事項〕や音楽の言葉を利用しながら書く経験を積んだり、可視化した教材教具の活用で音楽がわかるようになったりしたことにより、音楽を聴く視点をもちながら鑑賞できたことが明らかになった。

キーワード：鑑賞 創作 音楽づくり 共通事項 鑑賞の力

I 問題

学校教育は、「生きる力」を育むという理念の下、確かな学力、豊かな心、健やかな体の一体的な育成を目指している。学校現場では「学力向上」を重視し、基礎・基本の定着を図る教育活動が行われている中、国語科や算数科と同様に音楽科においても、読解力や言語力、そして思考力・判断力・表現力といった、今求められている力を身に付けられるよう、授業改善を図っていくことが大切である。これからの音楽科の授業は、活動から学習への転換を目指していかなければならない。これからの時代を担う子どもたちが、自己実現の基盤をつくり、社会の発展の原動力となって自ら進んで行動できるような「人間力」を、音楽科を通して育んでいきたいと考える。

しかしながら、現在では「活動あって学習なし」という音楽の授業が散見される。教科の時間であるにもかかわらず、教師主導の特別活動的な音楽の時間のことである。子どもたち自らがよりよい音楽にするために、フレーズや歌詞から意図をもち演奏に生かそうと工夫したり、アイデアを出し合ったり、鑑賞曲から得た知識や技法を自分たちの表現方法に生かしたりする活動を、小学校段階から仕組んで積み上げていくことが大切である。

*教育学研究科 教育実践創成専攻（教職大学院） 大学院生

一方中学校の現状で、生徒は複数の小学校から進学してくるが、進学元の小学校によっては音楽の感覚が身に付いていなかったり、創作活動が未経験だったりする。中学校の音楽教員は、そのような生徒の実態から、特に創作においては小学校段階に立ち戻って、音符の概念の説明をしたり、リズムについての指導をしたりといった必要があり、小学校の上のレベルの活動を仕組むことが難しい。具体的には、旋律をつくる活動を仕組むことができず、4小節程度の旋律づくりを行うのが精一杯という現状がある。

音楽における難しさは創作の場面のみではない。児童生徒からは「音符の長さや楽譜の読み方がわからないし、音楽を聴いても理解できない。」と声もあがることから、鑑賞においても難しさを感じていることが見えてくる。ところで音楽科における鑑賞では、客観的に認識した音楽的な特徴を踏まえて、音楽に対して自分なりの価値を見出して聴くことが大切である。価値を見出して聴くということは、主体的創造的に鑑賞している子どもの姿である。これからの長い人生において出会う様々な芸術や文化などに対し、美しさやよさ、大切さなどを見極めて、それらが自分や社会を幸せにし、豊かにするものだということを知性と感性によって実感できる力をつけるために、これからの音楽科教育では、音楽的な特徴を聴き取る力をつけることと、それらの働きが生み出すよさや面白さといった質的なものを感じ取ることができるようにすることが重要である。そのような授業をどのように仕組むのか、さらに、鑑賞と表現活動（歌唱・器楽・創作）を、どのような関連を図りながら授業展開をしていくのかが大切となってくる。ここまでにあげてきた音楽に難しさを感じるという傾向は学年が上がるにつれて強くなり、音楽は嫌いという児童生徒がいることも事実である。そのような児童を目の前にした時、どのように音楽の授業を組み立てていけばよいのか悩む教員も多い。

本論文における鑑賞の力とは、音楽の特徴を音楽的要素と結び付けて聴き取ることとする。具体的には、第一に〔共通事項〕を使うこと、第二に自分の思いや意図を〔共通事項〕を根拠にしながら表現することとする。以上の問題意識から本論文では、鑑賞の力を高めるためには、どのような手立てや取組が有効なのかを検討する。具体的には、〔共通事項〕を意識させる工夫をしたり、音楽の基礎的な感覚を楽しみながら身に付ける音楽遊びを取り入れたり、表現と鑑賞の関連を図った題材構成の工夫をしたりすることによって、鑑賞の力を高めることにつながるかどうか、小・中学校の両校での授業を通して検討する。

II 研究

本論文で鑑賞する力を高めることができたかについて検証するために、両校種での研究授業を行った。義務教育9年間を見通すために、中学校の音楽科の授業がどのように行われているかを知るために、まず中学校での検証を行い、中学校の様子を踏まえた上で、次に小学校での検証を行った。

1 対象および期間

- (1) 対象中学校と学年：A 県内公立中学校3年生
- (2) 実態把握調査と時間：平成26年5月 1時間×3クラス 計3時間
- (3) 授業時数：平成26年6月～7月 3時間×3クラス 計9時間

2 研究方法

- (1) 対象の中学校の規模・人数・男女比

全校で330名を超える中規模校であり、各クラスの生徒数は30名前後である。義務教育最終学年

の中学3年生を対象とした。学年3クラスあり、1クラス33～34名の生徒数。男女比は、6：4で男子が多い。

(2) 実態把握調査

5月に生徒の実態把握のため、どの程度音楽を聴きとることができるかということと、音楽の言葉を使いながらどの程度表現(記述)できるかという調査(平成24年度関東音楽教育研究会山梨大会音楽実態調査を使用)を行った。その後、全クラスを対象に研究授業を3時間ずつ行った。研究授業終了後に、再び7月に同様の実態把握調査を行った。初期に行った調査の時と同じ曲を聴いてもらい、どの程度音楽を聴きとることができるようになったのか、初期の表現(記述)と比べて、どの程度鑑賞の力が身に付いたかを調査した。

5月と7月の教示文

「この調査は、みなさんが音楽を聴いて、どんなことを想像したり、どんなところが好きだったり、心に残ったりしたかということを探るものです。テストではありません。リラックスした気分で、感じたことや気付いたことなどを自由に記入して下さい。」

設問1 (1曲目と2曲目それぞれに)

「音楽を聴いてどのように感じますか、また、どのような様子や場面が浮かびますか。」

設問2 (1曲目と2曲目それぞれに)

「そのように感じたり、様子や場面を思い浮かべたりしたのは、なぜですか。」

設問3

「あなたは、1曲目と2曲目では、どちらが好きですか。好きな方に○をして、その理由を書いて下さい。」

調査に使用した曲(中学校3年生対象曲)

- ・1曲目「スラブ舞曲ホ短調」ドボルザーク作曲
- ・2曲目「チャールダッシュ」モンティ作曲

(3) 中学校研究授業の題材構成

中学校では、音楽科の授業は週あたり1時間しかない。一題材に5時間も6時間も費やすことは、1か月以上の期間がかかってしまうので、長くても4時間程度が望ましい。そのため、鑑賞1時間→創作1時間→鑑賞1時間の計3時間の題材構成にした。表現領域と鑑賞の関連を図ることによって、音を音楽へと構成する力、音楽を形づくっている要素の関わり合いや曲想を感じ取り味わって聴く力を効果的に高めていくことができるからである。

創作は、9小節の旋律づくりとした。創作活動に使用する楽器には、鍵盤ハーモニカを選択した。なぜなら、中学校での鍵盤ハーモニカを使用した実践はほとんどないからである。小学校で慣れ親しんだ楽器が、中学校では使われていない現状がある。再び中学校の授業で活用できるかどうかについても検証したいと考えた。

題材名：コード進行を使って旋律をつくろう

身に付けさせたい力：

コードの構成音から音を選んだり経過音を取り入れたりして旋律をつくる力、及び、自分なりの解釈や価値について考えながら主体的に鑑賞する力を身に付ける。

学習指導要領との関連

内容 A 表現(3)イ、B 鑑賞(1)ア

〔共通事項〕 旋律・テクスチャ・形式・構成 等

(4) 音楽遊びと ICT 機器の活用

毎回の授業の導入では、リズム感覚を養うための音楽遊びを取り入れた。4小節のリズムを打つ活動やグループで音が重なるようなリズムを打つ活動である。授業がカノン進行の内容であったため、音の重なりとリズムの反復を取り入れ、生徒たちに意識させるようにした。生徒が打つリズムをパワーポイントで作成し、黒板に投影した(図1)。可視化しデータ化することで、教材として今後も活用しやすくなる。音符にも「タン」「タタ」と読み方も入れ、音符が読めない生徒にも取り組みやすいように配慮した。

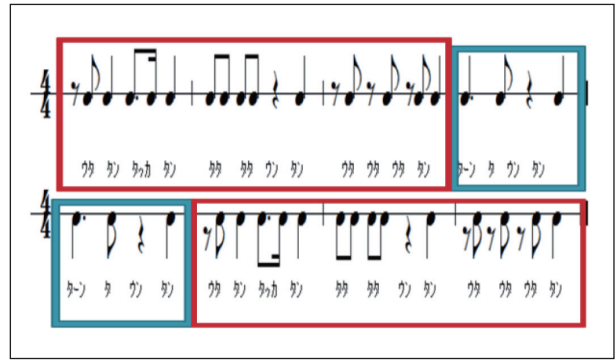


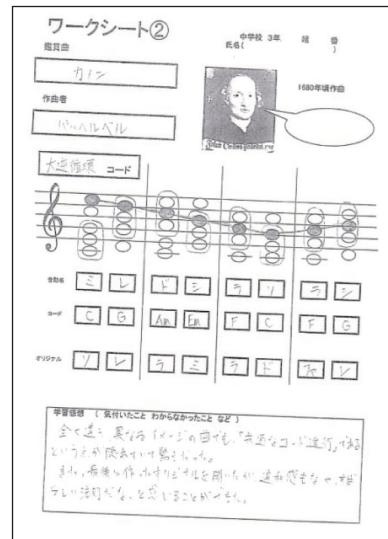
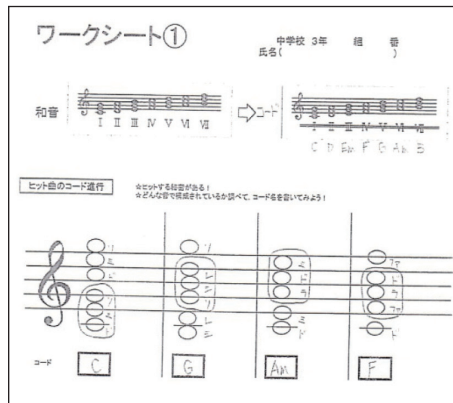
図1：リズム打ちのパワーポイント資料

また、ワークシートを電子黒板に写して、生徒にわかりやすくなるようにした。旋律づくりの手順をワークシートを使って示すようにしたり、楽譜などを可視化して音の動きがわかるようにしたりした。

(5) 中学校 学習の流れ (全3時間)

【第1時 鑑賞】

人々に親しまれている、有名な曲で使われているコード進行について着目する。今年度流行した「Let It Go」も「エーデルワイス」「Let It Be」と同じコード進行が使われており、ヒット曲には同じコードが使われているという共通点を知る。コードに興味をもたせたところで、パッヘルベルのカノンについて鑑賞する。ここでは、「カノンのコード」の構成音をつなげることで、旋律を作ることができることを理解する。



【第2時 創作】

「カノン」のコード構成音から旋律をつくる。鍵盤ハーモニカを使用し、メロディシート(図2)の構成音を1つずつ選択して、まず4小節をつくる。その後、その4小節を反復させて8小節にして、最後の1小節ではCで終わるようにした。(合計9小節) 経過音についての指導も行い、時間的に余裕がある生徒は取り組ませるようにした。

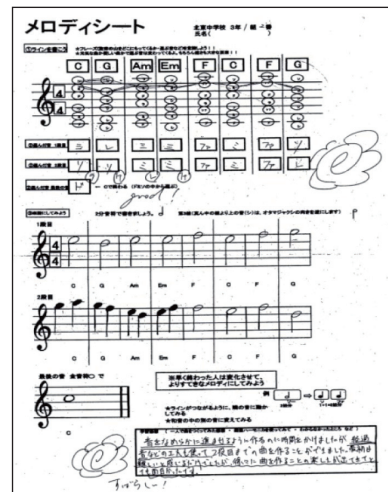


図2：創作で使用したメロディシート

【第3時 鑑賞】

「カノン」と「フーガ」の音楽的要素や構造、主旋律の音の重なり方、多声的な旋律の重なり方などの違いを確認しながら鑑賞する。さらに、「カノン」や「フーガ」について、どちらが好きか価値判断させるようにした。〔共通事項〕の言葉を使いながら、自分なりに感じたことや好きな理由を述べられるような設問を設定し、主体的に鑑賞できるようにした。

鑑賞シート①

中学校 3年 級 音楽

中央音楽科コードの及値が(丸)で行われている。

この曲の(丸)を参照し、その上でその曲を演奏するよう指導をしよう。以下の楽譜はその楽譜です。(丸)が省略されています)

カノンの音楽的要素、主旋律の音へのその要素が記されています。

第1バイオリンの音楽的要素が記されています。第2バイオリンは第1バイオリンに寄り添って演奏している様子が見られます。第3、第4の楽器がそれらが加わりますが他のパートは記されていない様子が見られます。

この曲は4声部での演奏が行われます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

カノンの音が4声部で演奏される様子が見られます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

カノンの音が4声部で演奏される様子が見られます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

カノン	フーガ
音色	木管楽器、弦楽器
リズム	4拍子、複拍子のリズム
メロディ	主旋律の音の重なり
形式	カノン (複拍子を含む)
構成	変奏

鑑賞シート②

中学校 3年 級 音楽

「フーガ」の構造、及値が(丸)で行われている。

フーガは楽曲の形式の中で非常に特徴的な楽曲といえる。その特徴は、同じ旋律が異なる音で演奏されることにある。

この曲は4声部での演奏が行われます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

フーガの音楽的要素、主旋律の音へのその要素が記されています。

第1バイオリンの音楽的要素が記されています。第2バイオリンは第1バイオリンに寄り添って演奏している様子が見られます。第3、第4の楽器がそれらが加わりますが他のパートは記されていない様子が見られます。

この曲は4声部での演奏が行われます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

フーガの音が4声部で演奏される様子が見られます。また、第1バイオリンは第2バイオリンに寄り添って演奏されています。

カノン	フーガ
音色	木管楽器、弦楽器
リズム	4拍子、複拍子のリズム
メロディ	主旋律の音の重なり
形式	フーガ (複拍子を含む)
構成	変奏

(6) 対象の小学校の規模・人数・男女比

全校で約 300 名の中規模校である。各クラス 25 名前後で、鍵盤ハーモニカを使用しての旋律づくりが可能な小学校 5 年生を対象とした。学年 2 クラスあり、1 クラス 22 名の児童数である。男女比は、6 : 4 で男子が多い。

(7) 小学校 実態把握調査

前述の中学校同様、9月に児童の実態把握のため、どの程度音楽を聴きとることができるかということ、音楽の言葉を使いながら表現(記述)できるかという調査を行った。前述の中学校同様、研究授業終了後の12月に、再び実態把握調査を実施した。9月に行った調査の時と同じ曲を聴かせ、どの程度音楽を聴きとることができるようになったのか、表現(記述)できるようになったのかを調査した。

9月と12月の教示文

「この調査は、みなさんが音楽をきいて、どんなことを想像したり、どんなところが好きだったり、心に残ったりしたかということをつねるものです。テストではありません。リラックスした気分で、感じたことや気付いたことなどを自由に記入してください。」

設問 1～3 中学校実態把握調査と同様。

調査に使用した曲(小学校 5 年生対象曲)

- ・ 1 曲目「愛の喜び」クライスラー作曲
- ・ 2 曲目「愛の挨拶」エルガー作曲

(8) 小学校研究授業の題材構成

本題材は、9月に行った実態把握調査に基づき、音楽の形式感を養うことと、中学校と同じ創作と鑑賞の関連を図った題材にしようと考えた。11月から12月にかけて研究授業を行った。第5学年 2 クラス、計 6 時間ずつである。

山梨県では、山梨県小中学校音楽教育研究会が主催する「音楽創作力くらべ」という創作活動を促す取組が毎年行われている。この創作力くらべは、より多くの児童生徒に創作体験をする機会となることをねらいとしている。同時に、音楽科の目標でもある、創作体験を通して多様な音楽を愛好する心情や感性を育み、豊かな情操を養うことをねらっている。応募資格は、小学校においては5・6年生に限定されている。この「創作力くらべ」の課題（図3）を、音楽への興味や関心を高めるとともに、音楽性を伸ばし自由な音楽表現力を育むよい機会と捉え、音楽づくりの活動として取り組むこととする。そして、県内の先生方が取り組みやすいように、パワーポイント資料を作成して、指導の一助となるようにしたいと考えた。

平成26年度「創作力くらべ」B部門
小学校 課題テーマ ア
ハ長調。入門者にとって扱いやすい課題である。



図3 創作力くらべの課題

二部形式16小節（a4-a'4-b4-a'4）の旋律をつくる「音楽づくり」と、楽曲の構造に着目させて聴く「鑑賞」を行い、表現活動と相互の関連を図りながら、〔共通事項〕である音楽を形づくっている要素を手がかりにして、音楽を聴く力を育てていきたいと考えた。

実態調査とは別に、6時間の授業の感想を書かせるカードも用意した。そのカードには、それぞれの授業で一番大事だと思ったことや感じたこと、考えたことなどを書かせるようにしたほか、研究授業の始まる前と終わった後に、『あなたにとって、曲づくりの「ひけつ」（＝うまい方法 や こつ）は何だと思えますか？』という設問への回答を求めた。この感想カードは、題材の学習の流れがわかるような構成になっているのと、授業前と後では、〔共通事項〕や音楽の言葉がどのように変化したかを見取ることができるようにしている。実態調査と併せて、どの程度知識の形成がみられるようになったかを見取る判断材料として活用した。

題材名：音楽の仕組みを使って、まとまりのある旋律をつくろう

題材の目標：

- 問いと答えや反復、変化などの音楽の仕組みを使って、二部形式16小節の旋律をつくる。
- 音楽を形づくっている要素の関わり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴く。

学習指導要領との関連

内容 A 表現（3）イ，B 鑑賞（イ）

〔共通事項〕反復・変化・問いと答え・フレーズ等

(9) 小学校 学習の流れ (全6時間)

【第1時 音楽づくり】

第5学年の音楽の教科書(教育芸術社)にも記載されている、フォスター作曲「静かにねむれ」の構成は、一番がa4-a'4-b4-a'4の16小節でくり返しと変化を利用して旋律をつくる例としてわかりやすい。A-Bの二部形式である。(図4)

第1時は、二部形式のもととなるハ長調のa4の後半2小節の旋律をつくることができるようにする。

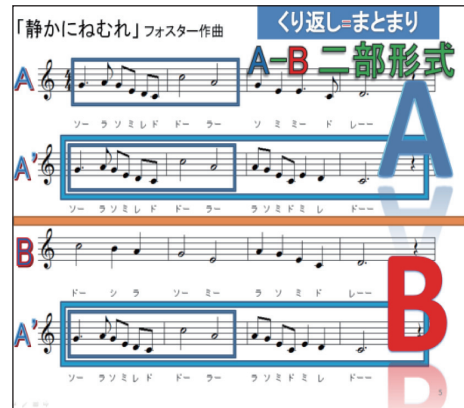


図4 使用したパワーポイント

【第2時 音楽づくり】

曲の構造を意識し、前時につくったa4をもとに、仕組みを使いながら、a'4の旋律をつくる。aの旋律の流れを意識しながら、a'の旋律は、くり返しと変化を取り入れて少し変わるようにし、さらに、終わる感じになるようにする。(図5)



図5 使用したパワーポイント

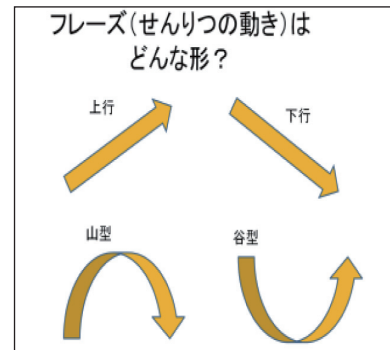


図6 使用したパワーポイント

フレーズの形にも着目させ、どのような曲にしたいのか、根拠となる音楽的要素を取り入れるようにした。(図6)

【第3時 音楽づくり】

曲の構造を意識し、仕組みを使いながら、bの旋律をつくる。前時までにつくったa-a'の旋律の流れを意識しながら、bの旋律は、旋律の特徴が変わるようにし、さらに、つづく感じになる旋律になるようにつくる。



図7 使用したパワーポイント

【第4時 音楽づくり】

2 段目である a'4 を 4 段目に記入し、自分がつくりたい旋律になっているか、仕組みを使ってつくれているか試行錯誤しながら旋律を完成する。フレーズの動きや問いと答えを意識しながら、反復や変化を使って自分がイメージする旋律を仕上げるようにする。完成したら、題名をつけたり、自分でつくった旋律が演奏できるように練習したりする。時間がある児童は、自分の作品を記譜し、ワークシートを完成する。(図8)

記譜が終わらなかった児童は、空き時間を利用して完成させることとした。

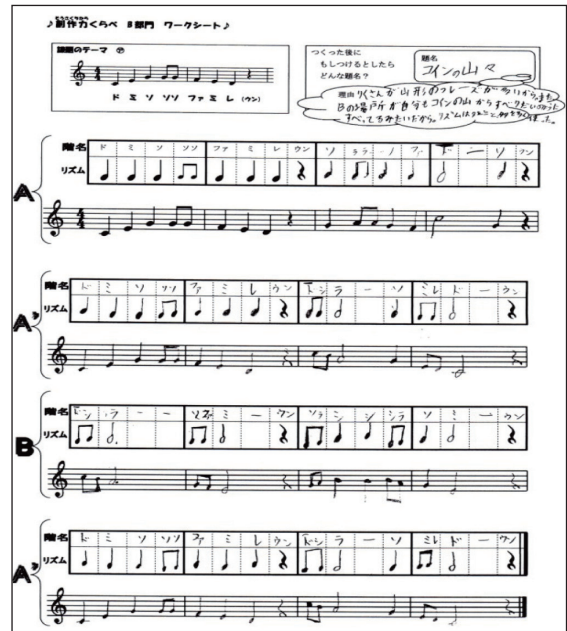


図8 使用したワークシート

【第5時 音楽づくり】 発表会

つくった思いや意図が伝わるように説明をしてから作品を発表する。聴く人がどのような旋律をつくったかわかるように、作品(楽譜)を大型テレビへ写すようにする。そうすることによって、フレーズの動きやリズムの変化や違いを把握しやすくなったり、題名に相応しい音楽かどうかを判断しやすくなったりした。

【第6時 鑑賞】

第5学年の教科書にある、ブラームス作曲のハンガリー舞曲第5番(管弦楽)を鑑賞した。主な旋律(ア, イ, ウ, エ)の反復や変化を捉え、速度や強弱など曲想の変化を感じ取らせる。旋律の移り変わりから、楽曲の構造A-B-A'の三部形式を捉えるようにし、実態調査でも弱かった構造的な視点をもって聴くことができるような指導を取り入れた。また、中間部のBの速度が変化しているので、指揮を取り入れて速度の変化を体で感じられるような指導も行った。(図9)

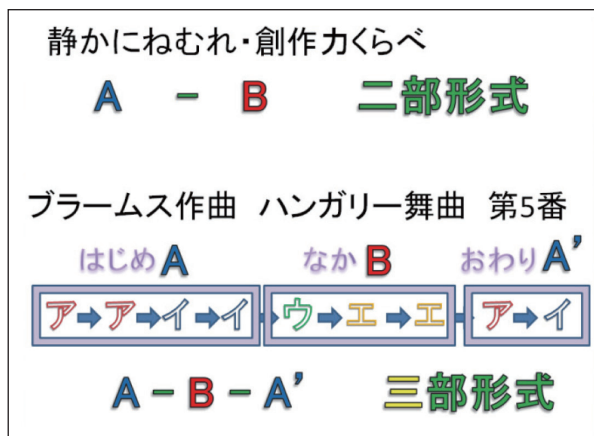


図9 使用したパワーポイント

III 結果

中学校と小学校での実践の前後に行った実態把握調査を比較し、どの程度音楽の言葉が増えたのか、音楽の言葉を根拠に自分の思いを伝えることができたかどうかについて検証する。

1 中学校

事前と事後の実態調査を比較してみると、事後では、[共通事項]の「旋律」「音の重なり(=テ

クスチュア)」「形式・構成」において、使用した生徒が大幅に増加した(表1)。研究授業において旋律の創作を行った経験を積んだこと、また、それぞれの言葉に着目させて音楽を聴き直したり、言葉を利用しながら書く経験を積んだりしたことによって、音楽を聴く視点としての〔共通事項〕などの音楽の言葉を習得することができたと考えられる。創作活動と鑑賞活動の関連を図った題材構成にしたからこそ、このような結果になったと思われる。ここから、以前よりも主体的創造的に鑑賞することができるようになったと言えるであろう。

表1 実態把握調査 山梨県内A中学校

〔共通事項〕及び音楽の言葉を使用した人数の比較と平均値

設問の種類	共通事項 音楽の言葉	音楽の言葉								平均値 一人当たりの 使用する回数 (個)	最小値 (個)	最大値 (個)
		速さ テンポ	旋律 メロディ	音の重なり テクスチュア 高音低音	音色 楽器 ピアノ バイオリン	形式・構成 ABA' Aダッシュ	強弱	くり返し	調性感 長調・短調 明るい・暗い			
1曲目の理由	事前	10	6	0	15	1	5	1	11	1.69	1	4
	事後	18	10	3	19	9	10	8	16	2.97	0	5
2曲目の理由	事前	17	0	0	12	0	4	0	7	1.25	0	3
	事後	25	9	3	18	5	9	5	7	2.72	1	6
どちらが好きかの理由	事前	10	1	0	4	0	2	0	8	0.84	0	3
	事後	16	7	5	7	3	2	8	11	1.94	0	5

2 小学校

事前と事後の実態調査を比較してみると、事後では、「リズム」「フレーズ」「形式」「音の高低」に関わる記述が増えた(表2)。これらは、旋律をつくる学習でよく使っていた言葉である。また、鑑賞活動でも音楽を聴く視点であった「速さ」「強弱」についても増えている。授業において〔共通事項〕や音楽の言葉に着目させたり、言葉を利用しながら書く経験を積んだりしたことにより、音楽を聴く視点としての〔共通事項〕などの音楽の言葉を習得することができたと考えられる。構造的な視点で音楽を聴くことができている「形式」については、全体から見ると少ないが、このような経験を丁寧に積み重ねていくことが大切だと考える。中学校の実践同様、習得した音楽の言葉を根拠としながら音楽的な特徴を踏まえて聴いている児童が増えたということは、以前よりも主体的創造的に鑑賞することができるようになったと考える。

表2 実態把握調査 山梨県内B小学校

〔共通事項〕及び音楽の言葉を使用した人数の比較と平均値

設問の種類	共通事項 音楽の言葉	音楽の言葉								平均値 一人当たりの 使用する回数 (個)	最小値 (個)	最大値 (個)
		速さ テンポ	音の高低	リズム タタ・タン 長い・短い	音色 楽器 ピアノ バイオリン	形式 ABA' はじめ中 おわり	強弱	フレーズ 上向き・ 山型	調性感 明るい・ 暗い			
1曲目の理由	事前	9	10	3	4	0	4	0	0	0.76	0	3
	事後	13	15	8	3	1	7	3	11	1.55	0	4
2曲目の理由	事前	1	7	3	5	0	7	0	5	0.69	0	3
	事後	3	14	5	10	2	10	2	8	1.31	0	4
どちらが好きかの理由	事前	1	0	1	3	0	1	0	10	0.4	0	2
	事後	3	2	0	4	0	6	2	9	0.64	0	3

表3 山梨県内B小学校 感想カード「曲づくりの秘訣」

〔共通事項〕及び音楽の言葉を使用した人数の比較と平均値

	音楽の言葉								平均値 一人当たりの 使用する回数 (個)	最小値 (個)	最大値 (個)	
	リズム タタ・タン 長い・短い	速さ テンポ	強弱	形式 ABA' はじめ中 おわり	フレーズ 上向き・ 山型	くり返し	つづく 感じ	終わる 感じ				変化
授業前	10	3	4	0	0	0	0	0	0	0.23	0	2
授業後	15	8	3	1	3	11	11	8	8	2.26	0	8

にはほとんど見られなかった形式についての記述、さらに鑑賞の授業で学んだ速さ、強弱など、多くの音楽の言葉が見られるようになった。

IV 考察

上記の結果に有効であったと思われる、①題材構成の工夫、②ワークシートの工夫、③個人の活動及びペア・集団での学び合い、④教材の可視化、⑤音楽遊びの経験、⑥クラスルームワードへの変換、さらに、今後の課題及び展望について考察する。

1 有効であった手立てや工夫

(1) 題材構成の工夫

題材を構成する際には、〔共通事項〕が、表現と鑑賞とで、一貫して使われていることが重要である。授業を通して音楽の言葉を知識として習得し、活用することができるようになったということは、教師が身に付けさせたい力を明確にし、意図的に計画すること、そして、表現活動だけではなく、鑑賞との関連を図ることで知識の形成が広がっていると分析できる。今後の新たな教材作りに役立てられるのではないか。

(2) ワークシートの工夫

ワークシートは、はじめは階名のみ記述であっても、そのまま記譜へ移行できるようなものが望ましい。また、旋律づくりの工夫がしやすかったり、学習の手順が明確であったり、〔共通事項〕などの言葉を明示しながら具体的に問いかけていたりしたことによって、音楽の言葉を意識しながら記述することができた。意欲的に学習に取り組んでいたが、学習意欲も、知識の形成の大きな力となる。

旋律をつくる経験が少ない生徒にとって、ワークシートが旋律づくりの成立を左右すると言っても過言ではない。学習意欲を維持しつつ、レディネスの差を最小限に収め、全員が主体的に旋律をつくるためにはワークシートの工夫が必要である。

また、自分の思いや意図を表現しやすくするために、「カノンとフーガのどちらが好きですか」という価値判断を問うようにしたり、理由の書き方を示したりした。さらに、2曲を比較鑑賞することによって、批評しやすくなり、感想の中にも批評文が見られるようになった。

小学校の実践では、紹介文を書かせるような設問を用意した。なぜかという、その曲を聴いたことがない人を想起させ、相手を意識することによって、音楽の言葉を使いながらうまく伝えようと主体的に取り組むからである。そのことによって音楽的知識の形成へとつながっていったと考える。

課題：あなたは、どちらの曲が好きですか？その理由を書いてください。

※書き方の例「好きな曲の理由として『曲目』の○○のところが好きです。なぜかという～」

生徒（男子） ※パッヘルベルのカノンが好きに○

一定のリズムであり、規則正しく進行しているところが好きです。なぜかという、大逆循環コードの音のはっきりと聴こえて、きれいな曲のように感じたからです。旋律の重なりも規則正しいからです。

課題：これまでの学習（気がついたり、感じ取ったり、想像したりしたこと）を生かして、この曲を紹介する文を書きましょう。

※「はじめは○○で、なかは◇◇で、終わりは▽▽です。」のように、それぞれの場面についての特徴を書き、最後に曲のよさについて伝えましょう。

児童（男子） この曲は、はじめは強くてテンポが速く、なかではだんだん弱くおそくなって、終わりははじめを短くしています。なかのところでは、身近なトライアングルが使われていてききやすいです。きいてみてください。

(3) 個人の活動及びペア・集団での学び合い

鍵盤ハーモニカを使用することで、個人で旋律づくりに取り組むことになる。児童生徒は、自ら挑戦しようと思ったり、〔共通事項〕を意識して使うようになったりした。この時、学習意欲を高めしておくことやスモールステップの活動を仕組むことも重要ではあるが、個人で取り組むことが主体的創造的な音楽活動へとつながっていると考える。そのためにも、鍵盤ハーモニカは大変有効である。授業を受けた中学生は、鍵盤ハーモニカを小学校以来使用していなかったにもかかわらず、自分の奏でる音と向き合い、旋律の創作活動に真剣に取り組むことができていた。小学校で培った技能を中学校でも有効に活用できると確信する。これからは、鍵盤ハーモニカを小・中学校で使用できるように備品として準備したり、児童生徒に自分用のホースを持たせたりする。また、個人の鍵盤ハーモニカを所有している児童については中学校へ持たせたり、中学校側からも小学校へ呼びかけたりするなど、そのような学区内の小学校と中学校の教員同士の連携が必要ではないか。

授業では、伝え合い活動を何度も取り入れた。旋律づくりの場面ではペア同士で聴き合ったり作品を交換したりして、友だちの作品を味わうようにさせたり、直した方がいいところを伝え合わせたりした。その際、話し合いがしやすいように次のようなシートを用意した(図10)。その結果、児童はお互いの作品を聴き合い、視点をもちながら話し合いができ、意見を伝え合う場面が多く見ることができた。

このようなシートを見ながら友達と伝え合う活動を積み重ねていくことで、〔共通事項〕の言葉や音楽の言葉を多用することによって知識の形成へとつながり、その結果、鑑賞の力を高めていったと考える。

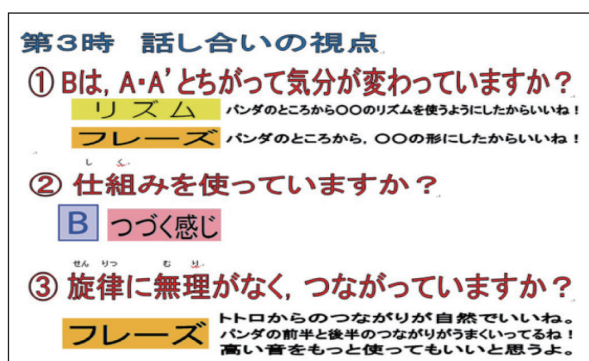


図10 話し合い活動で使用したシート

(4) 教材の可視化

旋律づくりで有効な教材として「音符カード」がある(図11)。リズムを決める際には、そのカードを入れ替えしながら納得するリズムを決める。各学校で、このようなリズムカードを用意して音楽室に常備しておくとうい。

また、児童生徒の作品を大型テレビへ映しながら授業を進めることも有効である(図4右)。大きな画面で同じワークシートを見ながら説明を聞いたり、どのようにつくったかをインタビューしたりすることによって、迷っている児童の手助けとなるような場面を設けた。活動の手順やヒントを得ることができ、学習意欲を維持することにつながっていったと考える。

これからの学校教育において、ICT機器の導入と活用は教師にとって必須である。鑑賞においても、耳からの情報だけでなく、目からの情報も入れることによって、よりわかる授業へとなる。しかし、カードのような手作業で活動しやすいものもある。アナログ的な教材も併用し、その活動場面に適した教材教具を使用することが重要であると考え。



図11 音符カード



図12 大型テレビの活用

(5) 音楽遊びの経験

授業の導入の段階では、音楽遊び（リズム）を取り入れ、本時の学習につながるようにした（図5）。たった2～4小節ではあるが、みんなで叩いたり、そのリズムをリレーしたり重ねたりするなど、ゲーム感覚で楽しむ活動を取り組んだ。そのことによ

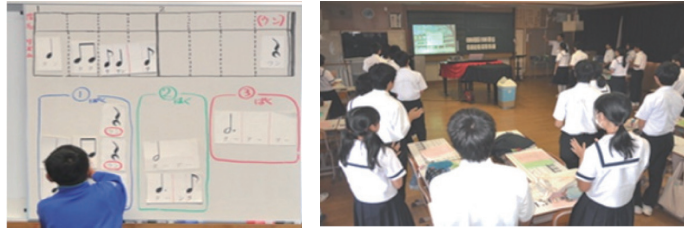


図13：音楽遊びの様子（左：小学校，右：中学校）

って、音符への抵抗感をなくしたり、つくる活動の経験を積むことにつながったりしていく。また、仲間が奏でる音を聴くことによって、音楽を分析的に聴く力だけでなく、拍節感も養われていくであろう。このような活動を意識的に取り入れ、短時間でも小学校低学年から丁寧に取り組むことで、やがて中学校での学習で高め、深められていく大切な活動になると考える。

(6) クラスルームワードへの変換

曲の構成が児童にわかりやすくなるように、馴染み深いキャラクターや動物を取り入れたり、言葉も工夫したりした（図14）。

このことによって、児童は曲の構成を理解し、二部形式の16小節の旋律をつくることができた。小学校学習指導要領音楽編には、中学校とは違って「旋律をつくる」と明記されていない。このように、〔共通事項〕の言葉をそのまま覚えるのではなく、キャラクターを使用して楽しく覚えたり、学級から生まれたクラスルームワードを共有したりすることによって、全員が主体的創造的に旋律づくりに取り組み、音楽的知識の形成・定着へとつながっていったと考える。

第4時 4段目をつくる **A-B 二部形式**

トトロ

トトロにおしゃれをさせる

パンダ くり返し

トトロにおしゃれをさせる

- ・もとなる a4 の旋律を「トトロ」
- ・a'4 の旋律は、a を少し変化させるので「トトロにおしゃれさせる」→反復・変化
- ・b4 は、全く違う雰囲気のため「パンダ」を登場→変化

図14：キャラクターを使ってわかりやすく

2 今後の課題及び展望

これからは、表現と鑑賞の関連を図った題材を意図的、計画的に年間指導計画に組み込み、取り組むことが必要だと感じる。作曲のコンテストである「創作くらべ」は、よい作曲の機会として、より有効であるのが確認された。小中学校の接続が叫ばれている今日、この取組が学区の小・中学校で実施されれば、小中連携のための「素材」となり得るだろう。

音を通して自己表現ができる機会を設けられるよう、作成したパワーポイントデータやワークシートの普及と活用を併せて各学校への呼びかけしていきたい。今回使用した教材は、音楽の指導が苦手の教員にとって使いやすいものではないだろうか。データで手に入ることによって、自分なりにアレンジできたり、毎年使うことができたりするので、教員の準備負担の軽減にもつながるであろう。

小学5年生はハ長調の課題に取り組んだ。ワークシートも活用すれば、今後もそのまま使用できる。6年生では同じB部門のイ短調の16小節に取り組ませてもよい。特に小学校教員は、低学年から培いたい拍節感や音符の概念などを養う音楽遊びを併せて取り入れて、継続的に指導していくこ

とが大切である。このような経験が小学校段階から積み重ねられないと、中学校における、より発展的な旋律創作の学習を仕組むことができないであろう。中学校部門では課題数も増え、二部形式だけではなく、A (a+a')- B (b+b')- A (a+a') という三部形式 24 小節というより長い旋律づくりも可能となるが、それには小学校での旋律づくりの経験が前提となる。音楽の授業で歌ったり、楽器を演奏したり、鑑賞曲をただ聴いているだけでは、児童生徒の一人立ちする力は育たない。中学校での高度な学びを保障するためにも、小学校段階からの学力の積み上げが必要である。国語科や算数科と同様でなければならないのである。

児童生徒が授業を通じて、〔共通事項〕や音楽の言葉を根拠にしながら音楽を感じたり音楽を分析したり音楽をつくったりしたことによって、音楽スキーマの枠組みが変容していった。断片的な知識の組合せが、少しずつではあるが、大きくなりつつある。たとえば、音楽の言葉を使えていないとしても、音楽の授業スキーマは変わったと感じている。この音楽スキーマの枠組みが大きくなっていくことを、研究授業をさせていただいた学校のみならず、山梨県内の小中学校で期待している。また、本論文を通して、山梨の音楽科教育の発展と、県内の、特に小学校の先生方の指導の一助となれば幸いである。

引用文献

- ・原田弘昭(2015). 鑑賞の力を高めるための知識の形成とその具体的方策 ―小・中学校における「音楽づくり(創作)と鑑賞」の授業を通して―. 平成26年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書. 161-168

謝辞

平成26年4月より2年間、山梨大学教職大学院で学ぶ機会をいただきました。平成26年度の院生1年次には、国中地域の学校、しかも中学校と小学校の両校種の実習を行えたことは、大変意義深いです。

中学校での実習では研究授業もさせていただき、やはり音楽指導は楽しいということに改めて気付くことができました。小学校は全教科を指導する面白さがありますが、一つの教科をさらに高め深める指導ができる面白さも感じました。なかでも、中学生でも鍵盤ハーモニカを使った創作の授業ができるということも体感し、これからの山梨の音楽教育における小中学校の接続の課題として追求していきたいと考えるようになりました。中学校での実習を通して、中学校でも勤務してみたいという気持ちが出るほど、短くも充実した楽しい実習でした。この気持ちは、私にとって異校種である中学校で実習できたからこそだと感じています。

前期、ご指導して下さった教職大学院教授の長瀬慶来先生、そして、良き相談相手としてご助言して下さった、当時院生2年の佐野良彦先生に改めて御礼申し上げます。今後の教員人生における大きな分岐点となりました。

後期の小学校での実習では、音楽づくりと鑑賞の関連を図った授業を6時間させていただき、指導改善に役立てることができました。特に、一般化をめざした教材作りにも力を入れたので、作ったパワーポイントデータを県内の先生方にお配りすることができました。多くの先生方に喜んでいただき、頑張った甲斐がありました。

前期の中学校の様子を踏まえると、やはり小学校の段階から歌唱・器楽だけではなく、多様な音楽をつくり出す経験を積んでおくことが大切だと痛切に感じています。また、鑑賞の時間にも、身に付けさせたい力を焦点化し、知り得た言葉を活用しながら、自分の思いや意図を書いたり伝えたりする活動を積み上げていくことが、歌唱・器楽・音楽づくりを含めたより豊かな音楽表現活動へとつながっていき、進学した中学校での深い学びへ展開していくことを確信しています。

後期にご指導して下さった教職大学院准教授の東海林麗香先生、そして、自分の指導の在り方を振りかえるきっかけを与えて下さった藤巻ゆかり先生に、改めて御礼申し上げます。

最後に、今年度ご指導して下さっている教職大学院准教授の一瀬孝仁先生には、音楽科のご指導だけではなく、ご専門の算数科についてもご指導ご助言を賜り、省察的实践家としての姿勢と授業改善を目指した実り多き実習の時間を過ごさせていただき、心より御礼申し上げます。そして、2年間の研修の機会を与えて下さった山梨県教育委員会、ならびに勤務校である上野原市立秋山小学校の教職員の皆様に、改めて御礼申し上げます。

平成27年12月吉日

原田 弘昭